



早川 正祐 特任准教授
Seisuke HAYAKAWA

研究分野：哲学・倫理学・臨床死生学

研究内容：(1) 行為論：共感や受容性という観点を手掛かりに、「脆さ」と「依存性」を多分に孕むものとして人間の合理性・反省性・自律性を捉え直す。(2) ケアの倫理：「社会化された認識論」の知見を取り込むことで、ケアの倫理の認識論的な展開を試みる。(3) 臨床死生学：さらにケアの倫理を、人間の死生に関わる複雑な臨床実践に耐えうるものとして展開する。

2013年9月 東京大学大学院人文社会系研究科 基礎文化研究専攻
哲学専門分野 博士号(文学)取得
2014年4月~2017年3月 三重県立看護大学看護学部准教授
2017年4月から現職=東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター
上廣死生学・応用倫理講座 特任准教授

病いの語りと共感の困難さ

病苦をめぐる共感に対する切実なニーズ

重い病いによって苦境に追い込まれた多くの人々は、「この苦しみを少しでも分かってほしい、認めてほしい」という切実かつ切迫したニーズを抱えているように思われる。それゆえ、そういった人との関わりにおいては、その苦悩の体験を何らかの仕方で共感的に認知すること——その体験の一部始終を共有することは到底できないにせよ——がきわめて重要なものとなる。

病苦に対する共感の欠如

しかしながら、こういった共感的な認知の根本的な重要性にもかかわらず、「共感こそが、病む者に対する関わりにおいて著しく欠けているものだ」という厳しい指摘がなされてきた。例えば19Cのロシアの文豪トルストイは『イワン・イリイチの死』で、まさにこの点を圧倒的な表現力をもって克明に描き出している。また現代においても同様の指摘はあふれている。例えば、哲学者で自身も難病患者であるハヴィ・カレルは次のように述べる。

共感。もし人間の感情の中で最も欠落しているものを挙げるならば、それは「共感」であろう。とりわけ、どんなものよりも病いというものに関してこそ、共感の欠如が明白に見いだされる。病いを患うあなたは、周囲の人々の無関心や嫌悪感といったものに直面することがあろう。そして、そういった周囲の無関心や嫌悪感によって、あなたの苦しみ・障害・恐怖といったものが、さらに深刻なものになるのである。病いになると、手に負えないことがたくさん起こる。しかし周囲の人々の共感の欠如は、病む人を最も傷つけるのである。(Havi Carel, *Illness: The Cry of the Flesh*, Routledge (2013) p. 45)

病苦に対する共感の困難さを形作るもの

苦しむ者に対して「共感することが大事」ということは様々な場面で繰り返し強調されているにもかかわらず、なぜこれほどまで、病苦に対する共感的認知——例えば、病いによって窮地に立たされた人の苦悩に耳を傾け、その苦悩の存在をきちんと認めること——は困難なものとして化しているのか。そこで本講演では、単に「困難なのだ」と言うだけで済ませるのではなく、「その困難の根深さがどのように形作られているのか」という困難さの形成因を、

- (1) 共感の媒体になる私たちの身体のもろさ
- (2) 私たちの身体のあり方を深く規定する社会的文脈

という相互に関連する二つの視点から考察する。その際、病いをめぐる物語論で著名なアーサー・フランクの『傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理』(2002)の議論を臨床における共感という文脈で捉え直しつつ考察を展開したい。特に注目したいのは、回復に向けて前進するという前向きな筋書きをもつ「復帰の語り」が、容易には抜け出せない深い苦しみの中で語られる「混沌の語り」というものに対する共感的な認知を妨げる点である。こういった点を踏まえつつ、「認識をめぐる摩擦」という観点から、臨床における共感の特徴づけることを試みる。